

二日目

温泉には、到着してすぐと今朝の2回入浴しました。渓谷沿いの露天風呂はなかなかの風情があり、温泉気分を満喫することが出来ました。今朝は8時にホテルを出発して、越前大野城、一乗谷朝倉氏史跡、福井城址、丸岡城の4か所を巡ります。

1 「天空の城」で知られる越前大野城

雲海に浮かぶお城として竹田城が有名になると、全国で同じようなお城の情報がにぎわいました。越前大野城もその一つです。大野は一度来たことがあり、私の大野に関する知識は里芋の産地であること、イトヨの住むきれいな清水が印象に残っています。



左の写真は雲海に浮かぶ大野城の写真を、私のデジカメラで撮ったものです。こうした景色を見ようとすれば当然のことですが、大野城に来ては見られません。少し離れた山の上から見なくてはならず、普通のツアーでは無理です。

① 越前大野城の概要

天正3年(1575)金森長近は、織田信長より大野郡の3分の2の領地を与えられ、翌年大野城の普請と城下町の建設を始めました。お城は亀山の山頂を削って平にして本丸を造り、麓に二の丸、三の丸を造る平山城です。

安永4年(1775)現在の大野市役所近辺から出火し、1,400戸を焼く大火となり大野城も本丸などを焼失しました。寛政7年に本丸を再建しましたが、明治6年(1873)新政府の「廃城例」により取り壊されました。

その後、昭和43年(1968)に旧士族の萩原貞氏の寄付により、天守閣を推定復元がされました。



② 越前大野城の歴代城主

金森長親近は後に豊臣秀吉に従い、飛騨高山3万8千石を治め、天正14年(1586)に秀吉から飛騨一国を与えられました。しかし、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いでは東軍につき、美濃の郡上八幡城攻めなどの功で2万石加増、初代高山藩主となる。その後4人の松平氏、8人の土井氏が着任しました。

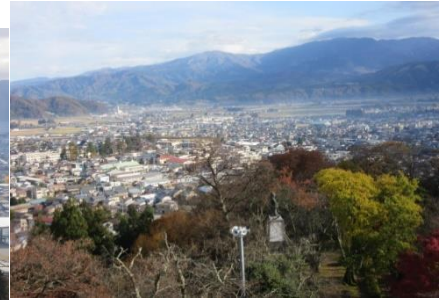
その中でも大野土井家7代目藩主土井利忠は、44年間の在任中に財政再建を成し遂げたほか、藩校の開校、洋学館の開設、西洋砲術の採用、藩の店「大野屋」を全国に开店するなど様々な事業を行いました。

山の中腹に利忠の像があり、その偉業について要約した看板と、大野藩の偉業と題してその取り組み内容が事細かに記載されていました。取り組みの要は①儉約②優秀な人材の登用と育成…今も同じですね。

③ 紅葉を愛でながら20分の山登り

9時10分頃に亀山公園駐車場に到着し、バスを降りると大きな櫓時計がありひとときわ目を引きまします。そして、

その先には小高い山の頂にお城の天守が望めます。ここからはちょっとした山登りですが、そこここに紅葉が楽しめるコースで、時々シャッターを押しながら登り20分くらいは苦になりません。所々に近道の急階段もあつたりしますが、ここは無理をせずに一步一步登りました。それでも、登り切った時には心臓がばくばく跳っていましたから、やはり年ですかね。



天守閣からの眺望

天守からの眺めは大野の町が山と山に囲まれているのがよく分かります、そんな大パノラマを堪能して、下るときも紅葉をしっかりと楽しむことが出来ました。山登りとお城と紅葉をしっかりと楽しむことができ、十分満足することができました。

2 一乗谷朝倉氏の遺跡

10時50分頃に遺跡跡に到着。この場所はパンフレットの地図を見ると、福井駅から海側ではなく反対の

山側へ国道 158 を足羽川にそって進む、JR 越美北線の一乗谷駅から1km ほどの所にあり、福井市街から 10km ほどにあります。狭い山間を流れる足羽川にそそぐ、支流の一乗谷川沿いに集落跡が 2km ほど続いています。復元された建物は一部であって周りは何もない原っぱといった感じです。



そんな中でも一つだけ存在感を示しているのがパンフレットの表紙に載っている「朝倉氏館跡の唐門」です。それ以外は草屋根と土壁の家が並んでいるのみなので、建物の見学はあまり興味がわきません。(左の写真が唐門)

① 朝倉氏とは

兵庫県養父市八鹿町の豪族で、南北戦争時代に朝倉広景が主家の斯波高経に従って越前に入国しました。朝倉孝景の代、1467年の応仁の乱での活躍をきっかけに一乗谷に本拠を移し、斯波氏、甲斐氏を追放して越前を平定しました。以後、孝景、氏景、貞景、義景と5代 103 年間にわたって越前の中心として繁栄し、この間、京や奈良の貴族・僧侶などの文化人が下向し、北陸の小京都とも呼ばれました。

義景は足利義昭を南陽寺に迎え桜を見る会を催しました。しかし、1573 年の刀根坂の戦いで織田信長に敗れ、朝倉氏は滅び城下町も焼き討ちにされました。

② 遺跡と庭園

いただいたパンフレットには、「特別史跡」「特別名勝」「重要文化財」の文字がおどっています。遺跡は

一乗谷川をはさんで両側にあつて、左岸側に街並みや無武家屋敷跡があり、右岸側に朝倉館跡、南陽寺跡庭園、唐門、朝倉義景墓所などがあります。戦国時代を伝える遺構が遺跡内の各所に整備されており、そこをつなぐ遊歩道を散策することで昔をしのぶことができますし、のんびりした雰囲気を楽しむことができます。



右岸にある唐門前の一乗谷川には、色とりどりの錦鯉がゆうゆうと泳いでいました。観光用の放流と分かっていても、錦鯉の泳ぐ姿は誰もが引き寄せられます。門を入ると朝倉館跡があり、その少し先には江戸時代の初めころに造られたと思われる石造りの朝倉義景公の墓所があります。

狭いエリアとはいえ周りに何もなく広々とした田んぼ道を歩いているようで、とても気持ちの良い散策を楽しむことができました。

3 県庁が占拠している福井城



ランチをすませて次に向かったのは福井城です。13時10分頃に到着し、大型バスの駐車場がなくてお濠近くにいったん停車して降りることになりました。場所的には福井駅前の通り一本さきの通り沿いになります。お濠の中は県庁、議事堂、警察本部の建物があり、県庁に入っていくわけです。お濠から見た眺めは、どこかで見たような.... そうです、まるで二重橋を思わせる景色です。城内に入っていくと県庁舎ビルの前に、馬に乗った武者像があります。結城秀康の像です。

① 福井城の歴史

慶長6年～11年(1601～06)に徳川家康の次男、結城秀康によって築城された平城です。かつては本丸を中心に二の丸、三の丸を配した、四重・五重に掘りをめぐらす大きな城でした。秀康は天正2年(1574)に家康の次男として生まれ、10歳で豊臣秀吉の養子に出され、「秀康」を名乗ります。さらに天正18年(1590)結城晴朝の養子となり、結城家を相続して10万石の大名となります。

関ヶ原の戦い後に越前一国68万石を拝領し、福井城の改修に着手。しかし、慶長12年(1607)病床にあった4月、34歳の若さで生涯を閉じます。

② 天守跡と三つの櫓

残されている絵図によれば1階と2階の間に屋根を設けない外観4層、内部5階の望楼型天守で、最上階

には高欄があったと考えられています。高さは約 30mにも達する大型の天守で、屋根は笏谷石の石瓦で葺かれていました。寛政9年(1669)の大火で焼失し、以後再建されることはありませんでした。ほぼ四角形の



城内の北の角に天守閣、東に良櫓(うしとらやぐら)、南東の隅に巽櫓(たつみやぐら)、西に坤櫓(ひつじさるやぐら)がありました。大火後、天守が再建されなかったことから、同じく三層に建て替えられた坤櫓と巽櫓は、ともに福井城を象徴する建物として明治初期までありました。

左の写真は天守台に残る石垣が、福井大地震で大きく傾いてしまったものです。そして、この石垣の近くに「福の井」という井戸があります。築城当時からあったと考えられ、城内の特別な井戸として扱われてきました。「福井」の名の起こりとする説もあります。



③ 屋根付きの「御廊下橋」

この橋は藩主が本丸と三の丸御座所の往復に用いた藩主専用の橋です。平成 20 年に福井城築城 400 年を記念して、県と福井市が明治初期の写真を基に復元しました。屋根付きで小さな長屋かと勘違いしそうなくらい立派です。

4 最も古い天守を持つ「越前丸岡城」

今回のお城巡りの中でもここ丸岡城と大野城に期待していました。大野城は天空の城として最近特に知名度が上がっていて、丸岡城は現存する天守の中で最も古い建築で知られています。最後に丸岡城を訪れることが出来たのも、楽しみはあとが良いから...

① 初代城主「柴田勝豊」

天正3年(1575)織田信長は越前の一向一揆を平定するため大軍を派遣し、当時丸岡の東北4km山中にあった豊原寺を攻撃して焼き払いました。信長はこの恩賞として柴田勝家に越前の国を与え、北ノ庄(福井市)に築城を命じます。

勝家は甥の勝豊を豊原に派遣します、翌天正4年(1576)豊原から丸岡に移り城を築きました。これが現在の丸岡城です。勝豊以後は、安井家清、青山、今村、本多、有馬と続きます。中でも有馬は最後となる明治2年まで8代続きました。



② 国宝に指定「現存する天守で最も古い」

丸岡城は現存する天守の中で最も古い建築で、通し柱がなく、一層は

二階三階を支える支台をなくし、屋根は二重で内部は三階となっています。このような望楼式天守は後の層塔式天守と比較すると、いかに城郭建築の初期のものであるかが分かります。また、屋根が全部石瓦で葺かれており、天守の鯨も石で作られています。元は銅板張りであったものを昭和 15～17年の修理の際に、当時は戦争中で銅板の入手が困難であることから、やむなく天守閣の石瓦と同質の石材で作りに換えられたものです。これは全国にもまれな特徴となっています。(左は石の鯨)



現在の鯨は銅板張りの物になっています。

昭和9年、国宝に指定されましたが、昭和23年福井大震災により倒壊しました。昭和25年重要文化財の指定を受け、昭和30年に修復再建されました。

③ 天守閣の石垣にまつわる秘話

勝豊が築城の際、天守閣の石垣が何度積んでも崩れてしまうので、人柱をいれるよう進言する者がありました。そして、その人柱に選ばれたのが二人の子供を抱えて苦しい暮らしをしていた片目のお静でした。お静は一人の子供を侍に取り立ててもらおう約束で、人柱になることを決意します。ほどなくして天守閣は立派に完成しました、しかし、勝豊は他に移封しお静の子は侍にしてもらえませんでした。お静の霊はこれを恨んで、年に一度藻刈りをやる卯月のころになると春雨で堀には水があふれ、人々は「お静の涙雨」と呼び、小さな墓を立て霊を慰めたといひます。

④ 一筆啓上日本一短い手紙の館

お城の周りは石組の庭もあって小公園にもなっています、そこはすばらしい紅葉のトンネルが続き気分も晴れやかになります。そして、駐車場に戻る途中には「日本一短い手紙の館」があります。



「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥せ」は良く知られていますが、後半のお仙泣かすなの意味合いは分かりませんでした。それが今回分かりうなずけました。

この手紙は徳川家康譜代第一の功臣で、鬼作左と呼ばれた本多作左衛門重次が陣中から妻に宛てたものです。ここでいうお仙とは、嫡子仙千代で、後の福井城主松平忠直に仕えた初代丸岡藩主本多成重のことで、内容は家を守り、家族を愛し、忠義を尽くす想いが、短い文の中に簡潔に込められています。

お仙が初代丸岡藩主本多成重であったことから、この手紙をモチーフに「一筆啓上賞」が誕生しました。こ

の賞は活字やメールでは伝わらない本物の手紙文化の復権を目指し、全国初の手紙コンクールとして平成5年にスタートしました。第1回日本一短い「母」への手紙には、海外18ヶ国を含む世界各地から 32,236 通の応募が寄せられました。

そして、平成27年に「一筆啓上 日本一短い手紙の館」が開館しました。これまでに一筆啓上賞に寄せられた 130 万通を超える手紙を展示する手紙文化の発信地です。

今回の旅は歴史と紅葉を十分、満足させてくれました!!

